

【書評】

チャールズ・キング著、前田弘毅監訳
『黒海の歴史：ユーラシア地政学の要諦における文明世界』
(明石書店, 2017 年, 469 ページ)

山添博史
(防衛研究所, 主任研究官)

Charles King, *The Black Sea: A History*
(Oxford University Press, 2004)

YAMAZOE, Hiroshi
Senior Fellow, National Institute for Defense Studies

本書は米ジョージタウン大学の国際関係研究者チャールズ・キング助教授（原著出版当時）が、黒海そのものと周辺地域の長く幅広い歴史を扱った貴重な著作である。イラン・グルジアを専攻する前田弘毅准教授らのチームが邦訳し、詳細な解説をつけている。その解説より深い指摘をすることは評者の能力を超えるが、多少はロシア史を扱ってきた者として本書を紹介したいと思う。あらかじめその特徴を一言で言うならば、本書は黒海沿岸諸地域の歴史ではなく、通商、人口移動、衛生、海洋環境、ナショナリズムなどの多様な観点から切り込んだ黒海そのものの歴史であり、さらには、地域に特別な関心を持たない読者にも益するところが多い。

キング助教授はまず第1章「先史時代の黒海」(An Archaeology of Place)において、冷戦時代に形成された勢力地図的な理解に基づく単純な区別の問題点を指摘する。そして多くの歴史は陸上に偏ってきたが、水上こそ人々をつなぐ生活圏だったと主張する。鯖がグルジア語でスクンブリア、ブルガリア語でスクンリーアと呼ばれるなどの例も挙げており（58 頁）、黒海の生態系を媒介とする人々の生活の共通性を示唆している。このような、黒海そのものにおける人々の連関は、それぞれの「国民国家の歴史」のギャップに埋没してしまいがちである（47 頁）。ネーションは黒海地域においては19～20世紀によりやく人々をまとめる力を持つようになり、同時に、現実にはそぐわない区別をもたらし、かつ大規模な人道危機をもたらしたのである。

第2章から第6章において著者は、代表的な文明勢力による「黒海」の呼称を章タイトルに掲げ、彼らの黒海関与を基軸としてその時代の歴史を叙述する（邦訳でのタイトルはその点も明瞭にしている）。

第2章「ギリシア・ローマと黒海：客あしらいのよい海」(*Pontus Euxinus*, 700BC-AD500)は、ギリシア人の記録による黒海沿岸住民の記述から始まる。ただし黒海沿岸の実態とは、「文明と野蛮」の明確な区別ではなく、植民都市における植民者と現地住民が入り混じった通商生活と、さらに広域の土地を舞台とするさまざまな（「スキタイ人」の名で代表される）遊牧民の生活であった。やがて地中海帝国として成長するローマが黒海地域にも拡大するが、黒海東南岸に位置するポントス王国のミトリダテス王は、黒海の北岸や東岸にも拠点や協力者を得て、ローマを大いに悩ませた（97 頁）。

第3章「ビザンツ帝国と黒海：偉大なる海」(*Mare Maggiore*, 500-1500) は、コンスタンチノーブルを都としたビザンツ帝国が黒海から富を得つつ、そこから生じる問題にも悩まされるさまを描く。中央アジアから黒海沿岸まで広がるステップ地帯では、さまざまな遊牧民が（必ずしも急速とは限らないが）移動し混在していた。著者は政治的・経済的影響力を持った集団として、黒海の北岸ないし東岸に現れた4つの集団すなわちハザール、ルーシ、ブルガール、テュルクを挙げる(137頁)。彼らとビザンツ帝国は必ずしも敵対するばかりではなく、交渉を通じ交易や同盟も行われるのであった。ハザールは交易を行いながらもビザンツ宮廷の派閥抗争に介入した。ルーシはビザンツ帝国に対し略奪や貢納要求を行って、のちには婚姻によって同盟関係となっており、ルーシの提供した傭兵がブルガールとの闘いに貢献したということもあった。13～14世紀にはタタール＝モンゴルが西方に現れたことにより、その後継となった北のキプチャク・ハン国（ジョチ・ウルス）と南のイル・ハン国（フレグ・ウルス）が黒海で接することとなった。

第4章「オスマン帝国と黒海：カラ・デニズ」(*Kara Deniz*, 1500-1700) は、二つの海すなわち黒海とエーゲ海を支配するオスマン帝国の時代を描く。コンスタンチノーブルの制圧に続き、オスマン帝国はクリミア・ハン国も服属させ、黒海の富を支配した。しかし、やがて黒海北岸にポーランド・リトアニア共和国、モスクワ大公国といった国家が勃興し、黒海は統治の困難なフロンティアと化していった。かつ、やがてロシアになっていくモスクワのツァーリは、ビザンツ・ローマとモンゴルの遺産を継承したと主張し、同じ二つの正統性に依拠するオスマン帝国にとっては厄介な相手となってきた(217頁)。

第5章「ロシア帝国と黒海：チョールノエ・モーレ」(*Chernoe More*, 1700-1860) の時代には、ロシア帝国は黒海への本格的な進出を始め、エカチェリーナ2世の時代に国境線を大幅に南下させる。ロシア帝国は陸上だけではなく黒海における戦いに勝って、オスマン帝国と条約を結び、黒海北岸の拠点を確保する。これによりクリミア・ハン国がロシアの保護国となり、やがて併合される。同時に進んでいたのが、ステップ遊牧生活の定住生活への転換である。ロシア帝国が国境線を広げたといっても、当初はその内側も外側もさまざまな遊牧民がいるフロンティア地帯であり、彼らは服属することもあれば略奪しに来ることもあるといった状況であった。彼らは18世紀を通じて、ロシア帝国の定住生活のもとに組み込まれていくのである。新たに獲得したノヴォロシア（新ロシア）が開拓され、クリミア半島の地名はギリシア的なものに変更され、オデッサが辺境における近代港湾都市として開発される。そしてドニエプル川からの穀物輸出でヨーロッパ市場とつながっていく。

これに続き、イギリスやフランスも黒海への関与を強め、オスマン領トラブゾン（かつてのトレビゾンド）からペルシアに至る通商ルートも開拓した。ロシア帝国のオスマン帝国との引き続く闘争として始まったクリミア戦争は、イギリスやフランスが加わることになり、その歴史名称が示すクリミア半島での激戦を経て、ロシアの黒海支配が挫折するという結果に至る。

第6章「国際社会と黒海：ブラック・シー」(*Black Sea*, 1860-1990) は、19世紀後半から20世紀という激動の時代を一つの章で扱うというものである。現代世界に関心が集中する読者には、この第6章を読むだけでも有益であろう。クリミア戦争後にヨーロッパ国際社会がより緊密に黒海を統合し、その大きな副産物として、国民国家の概念をもたらし、もともとそれにはなじまない社会が変容を強いられる過程を具体的な形で理解することができる。

クリミア戦争の結果、ロシア帝国は艦隊の保持を禁じられたが、国際規範が導入されること

により、オスマン帝国も行動を制約されるようになった。第一次世界大戦を経て、両帝国ともに瓦解し、新たな国家が形成されることになった。ルーマニア、ブルガリア、トルコは、国民統合のためにナショナリズムを掲げたのに対し、ソヴィエト連邦は帝国主義、資本主義、ナショナリズムに抗する普遍性を伴うイデオロギーを奉じた（375 頁）。第二次世界大戦も、黒海周辺で民族集団に対する過酷な措置を大きな規模でもたらしてしまった。この第 6 章は、20 世紀後半に進んだ、黒海の水質汚染と生態系の変化で結ばれている。

短い最終章である第 7 章「黒海の荒波を前にして」(Facing the Water) は、共産主義体制が去ったあとの黒海地域の諸事件に簡単に触れ、人々の移動とアイデンティティという論点で結んでいる。ここで引き出されるのはアーノルド・トインビーの第一次世界大戦後の言葉であり、キリスト教とイスラーム、ヨーロッパとアジア、文明と野蛮といった境界線は、遠くからはあるように見えても、現地に降り立てば意味がなくなるのであった（405 頁）。

本書は、黒海地域全体を扱う数少ない文献の一つとして、地域の特徴を理解するのに有益な著作である。日本語で類似した範囲を扱うものとして、各地域・分野の専門家による共著の木村崇他編『カフカース：二つの文明が交差する境界』（彩流社、2006 年）や、六鹿茂夫編『黒海地域の国際関係』（名古屋大学出版会、2017 年）が挙げられよう。2004 年刊のキング著はウクライナのオレンジ革命（2004 年 11 月）の前の出版でもあり、環黒海地域で国家間の武力紛争は考えられないとの評価をしているのだが、現代の事象や論点についてはやはり六鹿編を参照するのが適している。

キング著の優れた点としてまず挙げたいのは、黒海をめぐる複雑な諸相を、流れるような展開で次々と示していくその筆致である。例えば第 5 章のロシア帝国の叙述において、クリミア半島の獲得という勢力地図の大きな塗り替えの論点から、エカチェリーナ 2 世のクリミア半島視察に同行したフランス大使セギュール伯がアラビアン・ナイトのような遊牧民の移動を目撃したというエピソードに移り（255 頁）、そしてそのような遊牧生活の最後的一幕であったカルムイク人のヴォルガ川・ドン川地域への移動とトルキスタン方面への帰還の歴史叙述につながってゆく。このような著者の話題展開は、黒海沿岸各地域のすべての歴史事象を扱えなくても、黒海とは何かを読者に伝えるのに成功していると言えよう。それは数々の旅行者による紀行文の参照にも支えられている。

そしてその叙述は、黒海沿岸各国史ではなく、まさに黒海の歴史となっているのである。黒海の魚たちの名前は対岸で似た名前として残っており、ポントスとローマの昔から黒海をまたいだ拠点をつなぐ勢力が歴史を動かしてきた。人々の移動、疫病や海洋環境の問題も、沿岸国の一部ではなく黒海そのものの歴史の事象なのである。

キング助教授は特に、ナショナリズムや国民国家の形成に伴う深刻な問題に目を向け続ける。帝国の統治の都合による住民の強制移動は黒海周辺各地で起こってきたが、のちには「彼らは〇〇人である」という認識ゆえに強制移動ないし排除が行われるようになってくる。国民国家形成という強い力のもと、トルコ語を話す正教徒がギリシア人とみなされたために故郷を放棄し「ギリシアに帰還」することを強いられるといった歪みを生じており、また著名なものでは多くのアルメニア人にも悲劇がもたらされた（359 頁）。これは黒海地域に限らない、人類がなお向き合う問題であり、多くの読者が黒海の歴史を通じて理解する価値のある論点であろう。